

■12月21日

JNTO、2013年、訪日外国人客数、1000万人突破

観光庁は20日、2013年の訪日外国人客数が初めて年間1000万人を突破したと発表した。これまで過去最高だったのは10年の861万人で、これを12月20日時点で16%上回った。前年比では20日時点で20%増となった。

円安で訪日旅行が割安となったことに加えて、所得水準が上がっている東南アジア向けの査証(ビザ)発給要件緩和や日本とアジア方面を結ぶ格安航空会社(LCC)の就航拡大が追い風となった。

政府は成長戦略のなかで訪日客数を東京五輪のある20年ごろに年2000万人、30年に3000万人に増やす目標を掲げる。

(日経)12/20

[http://www.nikkei.com/article/DGXNASFS20038_Q3A221C1000000/ \(->](http://www.nikkei.com/article/DGXNASFS20038_Q3A221C1000000/)

[http://www.nikkei.com/article/DGXNASFS20038_Q3A221C1000000/\)](http://www.nikkei.com/article/DGXNASFS20038_Q3A221C1000000/)

(WSJ)12/20

[\[http://jp.wsj.com/article/JJ10308936797174144178420228554563535946178.html\\)\]\(http://jp.wsj.com/article/JJ10308936797174144178420228554563535946178.html\)](http://jp.wsj.com/article/JJ10308936797174144178420228554563535946178.html (-></p></div><div data-bbox=)

バンナ・エア(LCC)運航開始、成田—那覇・台北へ就航

11月にエアアジア・ジャパンから社名変更したバンナ・エアは20日、成田—那覇線、成田—台北線に就航した。当初は同路線と台北線をそれぞれ1日1往復させる。便数や路線を順次拡大し、来年3月中旬までに札幌、ソウルを加えて4路線、1日13往復となる。

使用機材はエアバス320(180席)で、搭乗率80%を目指す。

那覇行き初日の搭乗率は成田発が97.8%、那覇発が63.3%だった。琉球新報によると、成田からの第1便を那覇空港で出迎えた北原宏常務は「これから順次増便し、お客さまの利便性を高めていく。定時出発率も75%を目指し、信頼を獲得していきたい」と述べた。

(琉球新報)12/20

[http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-216952-storytopic-4.html \(-> http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-216952-storytopic-4.html\)](http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-216952-storytopic-4.html (-> http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-216952-storytopic-4.html))

(WSJ)12/20

[\[http://jp.wsj.com/article/JJ12159367433697194577118744180862600522614.html\\)\]\(http://jp.wsj.com/article/JJ12159367433697194577118744180862600522614.html\)](http://jp.wsj.com/article/JJ12159367433697194577118744180862600522614.html (-></p></div><div data-bbox=)

バンナ・エア(LCC)、石井社長、台湾線は5割が外国人、訪日外国人取り込みで経営基盤を強化へ

バンナ・エアが20日、就航を開始し記者会見した石井知祥社長は「台湾線の予約に占める外国人の割合は約5割。今後は6割まで増える可能性がある」と強調。前身のエアアジア・ジャパンは国内線を重点展開したが思うように旅客を取り込めなかった。その教訓を踏まえてバンナは近距離国際線に注力する方針を打ち出していた。拡大する訪日外国人を取り込み経営基盤を安定させたい考えだ。日経が報じた。

取り込みにあたっては、今月4日には台湾の需要の取り込みを狙い中国語のウェブを設けた。また、来年1月29日に開設する成田—札幌線でも「雪」をアピールして台湾からの訪日客を同路線に誘導する戦略を描く。3月1日に就航する成田—仁川線でも片道2000円のキャンペーン料金を打ち出し需要獲得に攻勢をかける。

(日経)12/20

[http://www.nikkei.com/article/DGXNASDD200MV_Q3A221C1TJ1000/ \(->](http://www.nikkei.com/article/DGXNASDD200MV_Q3A221C1TJ1000/)

[http://www.nikkei.com/article/DGXNASDD200MV_Q3A221C1TJ1000/\)](http://www.nikkei.com/article/DGXNASDD200MV_Q3A221C1TJ1000/)

スカイマーク、米子空港に就航、初の中国地方路線に参入

スカイマークは20日、米子空港に就航した。成田、神戸、茨城(神戸経由)の各空港を結ぶ3路線を開設し、来春にも羽田、新千歳、那覇への乗り入れを計画している。

直行便の成田、神戸線は1日2往復、茨城線は1往復。運賃は、成田と茨城が片道1万4900円で、全日空の羽田便(3万3770円)の半額以下。神戸は、搭乗3日前までの予約に適用される割引運賃なら4800円で、高速バス(4500円)やJRの新幹線と特急を乗り継ぐ阪神早特往復きっぷ(1万円)と同じ水準になり、乗っている時間は40分と大幅に短縮される。

神戸—米子路線は、飛行距離は280キロで最短35分間のフライトに、177人乗りジェット機を投入する。離島間を除き国内では珍しい短距離路線となる。

(神戸新聞)12/20

<http://www.kobe-np.co.jp/news/keizai/201312/0006583834.shtml> (-> <http://www.kobe-np.co.jp/news/keizai/201312/0006583834.shtml>)

(読売新聞)12/20

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/tottori/news/20131219-OYT8T01523.htm> (-> <http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/tottori/news/20131219-OYT8T01523.htm>)

AIRDO、新千歳—羽田線、就航15周年

AIRDOは20日、新千歳—羽田線の就航15周年を記念したイベントを新千歳空港で行なった。同社は北海道国際航空だった1998年12月に新千歳—羽田線に就航。現在は新千歳線8路線を含む、全13路線1日37往復を運航する。2002年には民事再生法の適用を受けたが、全日空の支援を受け経営は安定。今年も3月に新千歳—岡山線、6月に新千歳—神戸線、仙台線に就航するなど路線網を拡充。昨年10月からは現社名に変更し、現在は計14機を保有している。

読売新聞によると、後の路線展開については「未就航は九州、四国、中部。ビジネスチャンスがあれば路線を延ばしたい。国際線も、チャンスがあればアジア路線にも進出したい」と話した。

斎藤社長は「小さいが北海道ナンバーワンの航空会社を目指したい。羽田の発着枠を増やすことは難しいので、路線のない中部、九州、四国地方への就航を目指す。国際線にはチャーター便を14年度に飛ばし、アジア線に進出したい」と述べた

(苫小牧民報)12/20

<http://www.tomamin.co.jp/2013128277> (-> <http://www.tomamin.co.jp/2013128277>)

(読売新聞)12/21

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/hokkaido/news/20131221-OYT8T00021.htm> (-> <http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/hokkaido/news/20131221-OYT8T00021.htm>)

AIRDO、中期経営戦略「北海道をもっと身近にする“No.1エアライン”」へ

AIRDOは20日、新千歳を優先に新規路線を検討することや、新千歳の深夜・早朝の発着枠使用を前提に準備を進めることなどを柱とした、13～16年の中期経営戦略も発表した。3つの原点(Reliable信頼できる/Regional地域に根差した/Reasonable納得できる)を絶えず進化・深化させ「北海道をもっと身近にする“No.1エアライン”」を目指す。

日経のまとめによると、15年度下期以降に新たに航空機を2機程度導入し、国内で新千歳空港発着の新路線を開設する。コスト削減にも取り組み、営業利益は13年度見込みの3億円を16年度に29億円に引き上げる目標を掲げた。

現在は14機保有しており、14年度に1機減らした上で、ボーイング737型の最新型機を2機ほど導入する。新設する路線は今後詰めるが、東海や九州、四国など未進出の地域を中心に検討する方針。国際線は14年度中にチャーター便を運航した後、17年度以降に定期便を就航させたい考え。

低燃費機材への切り替えや、整備の内製化などでコスト削減を進める。1座席を1キロメートル運ぶことで得られる利

益(ユニットプロフィット)を新たな経営指標として採用、13年度見込みの0.07円を16年度に0.55円まで高める。16年度の計画は営業収入が13年度見込み比で21%増の600億円、純利益は2.7倍の16億円の16億に設定した。

(日経)12/20

<http://www.nikkei.com/article/DGXNZO64391490Q3A221C1L41000/> (->

<http://www.nikkei.com/article/DGXNZO64391490Q3A221C1L41000/>)

(AIRDOプレスリリース)12/20

http://www.airdo.jp/company/press/pdf/2013/931_131220.pdf (->

http://www.airdo.jp/company/press/pdf/2013/931_131220.pdf)

*出典: AIRDOプレスリリース

2. 中期経営戦略の概要



ティーウェイ航空(LCC)、佐賀—ソウル線就航、搭乗率80-85%を目指す

ティーウェイ航空の佐賀—ソウル線が20日、就航した。佐賀空港におけるLCCの国際線は、中国の春秋航空の上海線に次いで2路線目。使用機材はボーイング737(189人乗り)で週3往復運航する。

ソウル線は県が誘致し、7月に合意書を締結。飛行時間は、片道1時間20分。料金は片道4000~2万円(燃油サーチャージなどは含まない)。県は今後、着陸料や管制塔使用料の補助など、3年間で計1億5000万円を支出する。初便のソウルからは、153人が搭乗し来日した。

読売新聞によると、同社の成哲鎬(ハムチョルホ)代表理事は「これまで日本の観光といえば、温泉、買い物、ゴルフだったが、佐賀には加えて歴史や文化がある。80~85%の搭乗率を目指したい」と話した。

(読売新聞)12/21

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/saga/news/20131221-OYT8T00053.htm> (-> <http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/saga/news/20131221-OYT8T00053.htm>)

大韓航空、岡山—仁川線、減便の週3便を週7便へ復便

大韓航空は20日、10月に週4往復へ減便した岡山—ソウル便を、来年2月8日から週7往復に戻すと発表した。搭乗率が堅調な上、2、3月は学生の卒業旅行シーズンで需要が見込めると判断した。同路線は日韓関係の冷え込みで4月以降、月平均搭乗率が60%台に低迷。減便後の10、11月は70%台後半で推移している。

山陽新聞によると、同社日本地域本部の崔晶皓本部長が岡山県庁に伊原木隆太知事を訪れ「欧州や東南アジアからソウル経由で岡山を訪れる旅行者を増やしたい。好調ならば増便も検討する」とした。

(山陽新聞)12/20

http://www.sanyo.oni.co.jp/news_s/news/d/2013122020224489/ (->
http://www.sanyo.oni.co.jp/news_s/news/d/2013122020224489/)

チャイナエア、高松—台北線、来年3月末に増便を計画

チャイナエアラインが週2往復で運航する高松—台北線が、早ければ来年3月末にも、週4往復に増便される見通しであることが分かった。運航ダイヤなどは調整中で、決定次第、同社が発表する。台北線は今年3月21日に就航し週2往復で運航中。11月までの月間平均搭乗率が65・6%~85・4%と好調を維持していることから、増便の方針を決めたとみられる。

四国新聞によると、チャイナエアライン高松営業所の張継文所長は「現在は観光利用が中心となっているが、4往復で利便性が高まれば、今以上にビジネス需要も見込めるだろう。早ければ年内にも社内で正式決定できる見込み」としている。

(四国新聞)12/21

http://www.shikoku-np.co.jp/kagawa_news/economy/20131220000157 (-> http://www.shikoku-np.co.jp/kagawa_news/economy/20131220000157)

航空大機墜落事故、法令に反し雲に進入安全委が報告書、航空大・国交相に指導監督を勧告

運輸安全委員会は20日、2011年7月、航空大学校帯広分校の訓練機が墜落し機長である教官、学生1名及び教育研究飛行の教官の3名が死亡し、学生1名が重傷を負った事故に関して、男性教官が山を覆った雲に近づくコースを飛行させた結果、地表に接近したことに気付かず墜落したとする調査報告書を公表した。

訓練機は目視で周囲を確認する「有視界飛行」中で、雲への接近は法令で禁じられているが、教官は以前にも雲の中を飛行させていたとみられる。

安全委は、航空大が01年に独立行政法人化されて以降、事故が続発したと指摘。危険な指導方法などの情報が見逃される組織風土の見直しを求め、国土交通相にも指導監督を勧告した。

■運輸安全委員会 報告書

<http://www.mlit.go.jp/jtsb/aircraft/p-pdf/AA2013-9-1-p.pdf> (-> <http://www.mlit.go.jp/jtsb/aircraft/p-pdf/AA2013-9-1-p.pdf>)

(時事ドットコム)12/20

http://www.jiji.com/jc/c?g=soc_30&k=2013122000217 (-> http://www.jiji.com/jc/c?g=soc_30&k=2013122000217)

(運輸安全委員会 HP)12/20

<http://jtsb.mlit.go.jp/jtsb/aircraft/detail.php?id=2028> (-> <http://jtsb.mlit.go.jp/jtsb/aircraft/detail.php?id=2028>)」

春秋航空(LCC)、中台路線で高い搭乗率

(産経bizによると)

台湾海峡兩岸を結ぶ路線で大陸の民営航空会社の動きが活発化してきた。格安航空会社の春秋航空は、2014年の春節(旧正月)に臨時便を運航、上海—台北間の片道最低価格を330元(約5653円)とすると発表した。春秋航空は今年10月27日、12月1日にそれぞれ上海—高雄、上海—台北路線の運航を開始。全便ともほぼ満席状態になっている。吉祥航空もこの路線での競争に参加しており、高い状態が続いていたチケット価格が下がり始めた。

(産経biz)12/20

<http://www.sankeibiz.jp/business/news/131220/bsk1312200500001-n1.htm> (->
<http://www.sankeibiz.jp/business/news/131220/bsk1312200500001-n1.htm>)

タイ国際空港社長辞任

(newsclip.beによると)

タイ国際航空は20日、ソラジャク・カセームスワン社長が健康上の理由で辞任すると発表した。

タイ航空は1—9月に63・5億バツの最終赤字を出し、経営が低迷。滑走路をオーバーランするなどの事故も相次ぎ、政府内からソラジャク氏の責任を問う声が上がっていた。

ソラジャク氏はタイの私立アサンプション大学法学部長、法務副次官、首相府次官などを歴任。2012年10月、タイ国営メディア会社MCOT取締役会長からタイ航空社長に転任した。

(newscli.be) 12/20

<http://www.newsclip.be/article/2013/12/20/20174.html> (-> <http://www.newsclip.be/article/2013/12/20/20174.html>)

キャセイ航空、ボーイング777-9x、21機購入

キャセイ航空は20日、ボーイングの旅客機「777-9x」を21機購入することで合意したと発表した。表示価格ベースでは約75億ドル(約7800億円)相当の取引となる。

キャセイ航空の香港取引所への届け出によれば、ボーイングからの受け渡しは2021—24年を想定している。

(bloomberg) 12/20

<http://www.bloomberg.co.jp/news/123-MY3NLT6TTDS601.html> (-> <http://www.bloomberg.co.jp/news/123-MY3NLT6TTDS601.html>)